

■ 書 評



脳と心の考古学 —統合失調症とは何だろうか—

糸川昌成 著
日本評論社
2020年2月 208頁
本体価格 2,500円+税

本書は、精神医学領域の科学者としてよく知られている著者が、2017年から2019年にわたり『こころの科学』で連載していたシリーズを、改めてまとめ直したものである。第1部「統合失調症とは何だろうか」、第2部「精神医学とは何だろうか」、第3部「人間にとっての進化と病」の3部構成となっているが、堅苦しい学術論文ではなく、親しみやすいエッセー集と紹介するのがよいだろう。

「心は脳の働きである」という誰しも当たり前だと思っていることに、科学者の立場から疑問を投げかける。自分自身の観察から、そして歴史的なさまざまな出来事から、心はそう簡単に脳には還元できないことを、あちこちに例を挙げて示している。取り上げられているテーマは精神医学の枠内にはとても収まりきれず、一般医学、生物学全般、社会、宗教、考古学、天文学、物理学等々、著者の関心の向かうままの広がりを見せる。ときに連想ゲームのような面白い展開も随所にみられる。例えば、第7章「コトの科学とモノの世界 精神疾患はモノかコトか？」をみてみよう。まず、著者の子どもの頃の「鳥居の風景の記憶」から始まるのだが、鳥居から林羅山の「地球論争」に、そこからデカルト、神経細胞、右脳、物質、自己と非自己、モノとコト、そしてイム、ユタ、そしてユタの対話から「鳥居」へと戻るのである。

全体の3部構成は、もともと想定されていたものではないだろう。一つ一つの章は独立していて、前後を関係なしに読んでみても楽しめる。どの章も、とことん調べあげられていて、こんなことまでよく知っているなあと驚かされる。最先端の科学的知見も紹介されているのだが、「脳と心の考古学」と銘打っているように、基本的にはさ

まざまな歴史を取り扱っている。著者は、歴史そのものを心の営みとして捉えているのだろう。もちろん中心にあるのは、精神医学のそれであるが、精神医学そのものが自然科学と社会科学の2つの領域にまたがっていることから、その歴史はおよそ人間の営み全般にまで広がる。そして著者は学問的な歴史だけでなく、自身の記憶・歴史を随所に忍ばせている。自分自身のこと、家族の思い出や患者とのやりとりが鮮やかに描かれている。その描写はとても温かみがあって、思い出を離れた科学的内容を扱っていても、読者にやさしく語りかけてくれているように感じられる。難しい内容であっても、そうなんだあ、とわかったような気にさせられてしまうのが、なんとも心地よい。

サブタイトルに「統合失調症とは何だろうか」とあるが、本書には「統合失調症とは〇〇である」というような結論が導かれているわけではない。科学者が統合失調症にアプローチする際は、統合失調症は物質的な異常として実在していることが前提となるのだが、著者はその前提にも本当にそうなのだろうかという疑問の目を向ける。そして統合失調症に限らず、精神疾患概念は内科疾患と決定的に異なる形で定義づけられていて、内科疾患のように病理的実体を有する自然種ではないという。このような見解を持ちながら、科学者としてその実体を探そうとすることは、相当な苦勞が伴うだろう。それは従来から当たり前に行われてきた、現行の診断基準を満たす統合失調症と診断される患者と健常群を比較することで何かが見つかるはずだというアプローチでは成果が上がらないだろうということに気付いているからである。

脳と心の関係というフレーズはごく当たり前に使われているが、われわれはこれを単純に因果関係のように捉えてしまう。そうではないと認識している科学者は少数派だと思うのだが、そのような考えを科学者の立場で堂々と打ち明ける著者が、今後どのような研究を進めるのだろうか、本書を読みながらそのような期待を抱く。本書は精神医学に関心のある一般読者にも読みやすく、あちこちで目からうろこの体験をするだろう。ぜひ推薦したい。

(古茶大樹)